

現代のことば

隅地 茉歩



ちつい熱くなり、椅子から立ち上がって身振りまじりに。力があつた。

めて確認しておきたいものでもあつた。

感に「読み」、「耳を傾け」続けていい。

コンテンポラリーダンスの振付家でありダンサーである私は、ふだんの舞台活動の中で殆ど台詞を発するということがない。また、そのことに対するさ

2日間にわたって熱演を見せてくれたあの中学生たちは、これからどのように変化していくだろう。閉会後の控室に質問に来た、熱心な女生徒たちの顔が目に浮かんだ。

圧倒的に少女の比率の高い、

青々と熱のこもる身体。13歳から15歳にかけての総勢65人が懸命に演劇に取り組む身体。

先月中旬、2日間にわたって中学校演劇（京都市中学校教育研究会演劇部会第64回合同発表会）の審査を担当した。演劇の専門家以外に、身体の動きについてのアドバイスをする人間も必要とのことで呼んで頂いたようだ。参加校は公立私立合わせて11校。事前に自宅に送られて

きた脚本を読みながら、それらがどのような舞台作品に実るのか、想像を膨らませて当日を迎えた。出演者である中学生たちの身体がどれほど生き生きするのか、作品の内容とどれほど一つになるのかを見せてもらいたいと思つたのである。

持ち時間は各校30分、鑑賞時間はトータル5時間半に及んだ。閉会までに最優秀校など数校を選出、講評の場では一校一校にコメントしていく。そのう

駆けつけたことで息切れした動作を表すのに、曲げた両膝に手をつくという形を選ぶことでは安心してしまえるのか、率直に尋ねてみる。「皆さんの観察眼はそんなものじゃないはず。こんな時は大抵こうするよなあ」という思い込みと、今日サヨナラしましようよ」と、ある意味挑発もしてみる。珍しい人種もいるものだと、半ば呆れられたことだろう。けれども、その時参加者の中学生たちに投げかけた言葉は、自分自身に対しても改

ほどの違和感もない。むしろ、身体を動かすこと自体が発語する感覚に近く、踊ることは他者に語りかけることでもあると常常思つてゐる。言い方を変えるなら、私にとって、人の身体の動きは単純に目で見るものというよりも、その身体から発散されてゐるものを見ることである。身体から発信されている情報を注意深く受け取ることは、時々刻々変化し続けている、私たちを取り巻く環境に、身体感覚をもつて向き合うことを探求している。このことを探求して行けるスタートを既に切つている彼ら、鈍感な大人にならないプラットホームに、まずは降り立つて、できる限り繊細かつ敏

現代のことば

空港に降り立てます向かう

のは手荷物受取所。黒いベルト
コンベヤーが、吐き出されでは
吸い込まれていく場所に行かれ
た経験をお持ちの方も多いこと
だろう。

先月の国内遠征の帰り、私は親子連れやカップル、出張帰りのビジネスマンなどに混じってその場所にいた。そこでは、お互いの邪魔をするようなことは起きない。自分の荷物を引き取るのはとても個人的な作業で、他人の介入する余地はないから

隅地すみじ



取り扱い注意

隣うしたばかりのそのトランク
もろとも、遠ざかり始めていた
女性の所に慌てて駆けつけた。
お察しの通り、私のトランク
は危うく見ず知らずのお宅にお
邪魔してしまつかも知れなかつ
たのである。仮に時間差があり
過ぎて彼女を見つけられなかつ
たらどうなつていたことか。届
け出の煩雜さや、自分の物が無
手元に戻つてくるまでの落ち
かない時間を想像して、少な
くらす肝の冷える思いがした。
それらを未然に防げたことに
謝しながらも、私は道すがら
度もそのできごとを反芻し
。実は私のトランクは、この
行中にタイヤ4輪のうち1輪
裂けてほゞ使ひ物になつない

張るには多少てこする代物である。逆に私が彼女に届けた方はほぼ新品で、快適に滑るものだつた。私のトランクを引いて歩き始めた時に、違和感は無かつたのだろうか。

張るには多少てこする代物である。逆に私が彼女に届けた方はほぼ新品で、快適に滑るものだつた。私のトランクを引いて歩き始めた時に、違和感は無かつたのだろうか。

他人の傘を間違えて差して帰りすることはよくあるが、他人の履物を履いて帰ることはない。なぜなら、履物は持ち歩き癖がいやとうなく染み付いていて、自分ではない誰かの身体の動きが封じ込められる物だからだろう。履物ほどは肌との密着性がないとはいってやうに過ごせる範囲のものだつたのだろうか。身体の感受性ということを思わずにはいられなかつた。

それでなくとも目による情報の認識に過剰な判断を預けがちな昨今である。そこが肥大すると、視覚と等価であつてほしい他の身体感覺がぼんやりしてしまふ。例えば、持つ、引つ張る、押す、ひねる、回すなど、対象との接触を伴う動作には、必ず「具合」というものが存在する。それは「心地」とも通じていて、快不快の分かれ目をも左右してくれる。日常の中でのこの種の感覚を研ぎすまして、身体操作の集積としての記憶を、微細に更新しながら暮らしてみてはどうだう。そのおかげで命拾いをするようなことだつて、万が一にはあるかも知れない。

幸いあの日の二つのトランクには危険物は入つていなかつたようだが。(振付家・ダンサー)

それでもなくとも目による情報認識に過剰な判断を預けがち、昨今である。そこが肥大する視覚と等価であつてほしいの身体感覚がぼんやりしてしす、ひねる、回すなど、対象の接触を伴う動作には、必ず「合」というものが存在する。これは「心地」とも通じていて、不快の分かれ目をも左右してくれる。日常の中でのこの種の見を研ぎすまして、身体操作の蓄積としての記憶を、微細に研しながら暮りしてみてはどう。そのおかげで命拾いするようなことだつて、万が一にはあるかも知れない。

ひと月に一度の稽古だった。下鴨の閑静な住宅街の一角に、習字用具を持ってでかけていた頃がある。修士課程在学中のことだ。その頃の私は日本の古典学が専門だったのでも、影印本をすりすりと読めるようになりたいと思い、そのためには自分が草書を書けるようになることから始めるべきではないかと考えたのである。書道を嗜み始めた最初のお手本はいろは歌だった。

隅地 すみじ
茉歩 まほ



手 跡

組むべき要点を簡潔に述べてい
かれる。あるいは頭を垂れ、あ
るいは軽く納得のため息を漏り
し、先生の言葉の意するところ
を瞬時でも早く結晶させようと
自分の席に戻る先輩方。もちろ
ん言い訳をする人などいない。

いつになく時間を忘れて宿題に取り組んだ。なぜその日は没頭できたのか、巡り合わせとしか言いようがなかつたが、遅刻寸前まで食い下がり、下宿の狭い6畳は墨の匂いで充満した。その朝の一枚を選んで差し出した私の顔を、先生は初めて見上げて微笑んで下さった。囁んで含めるように、いくつかの心に残る言葉まで下さった。

筆跡と同義の「手跡」という語が意味するところとは何か。「足跡」ならば、持ち主の重心の移動のさせ方や歩の運びのリズムの刻印である。「手跡」は思惟が着火し、動きとなつて、腕から放出され凝縮されたものの軌跡に他ならない。身体の操作とすることに一つの照準を置いて仕事をするようになった現在、あつためて、亡き師の静かな腕の動きを擁する体幹の強度に想像が及んだ。

もの。墨の色のある所にだけ目を奪われないようにしなさい」前者は物事に取り組む姿勢そのものを、後者は物事を受け取る在り方そのものを示して下さる言葉だった。「高齢だった先生が亡くなられて、もう長い月

に想像が及んだ。

踊ることは、自分が筆となつて空間に「手跡」を残していくことだ。瞬時に消えていくことと表裏の営みは、観る人の心の紙に墨を落とすことでもある。

(振付家、ダンサー)

日が経つ。実に時折、先生の残して下さったお手本を眺めることがある。

現代のことば

隅地

茉歩



ずは受験したせいだとはさすがに思わなかつたが、心残りがしばらく尾を引いた。その後、すぐに京都での学生生活がスタートし、富士山は私にとつて次第に縁遠いものとなつていつた。

私は3歳から高校卒業までを四国で過ごした。出身高校では、地元を出て関東圏の大学に進学しようとする同級生が多く、そんな私たちの間で、「でかける道中、新幹線の中から富士山が見えたなら受験はうまくいく」というジンクスがあつた。在校生の合格が決まるとき、職員室の壁に大学名と合格者の名前が順次張り出されるのが習いとなつていた母校。次々に増えていく先輩たちの名は、新幹線の中で富士山を見ることのできた人たちのリストでもあつた。

高校3年となり、東京受験に向かう際、父は何を思ったか「飛行機で行け」と言つた。結果のいかんにかかわらず、何か特別な体験をさせてやろうと思つたのだろう。生まれて初めて飛行機に乗ることで、私はすっかりジンクスのことを忘れ、出発が夜だと知つても富士山を思い出すことはなかつた。宿泊先のホテルのフロントに赤富士の額を見つけた時、思わず声を上げてしまつたわけである。

ところが、昨年は仕事始めも仕事納めも富士山に縁があつた。正月の公演で訪れた山梨では「裏富士」と、年末のワークショップ先の静岡では「表富士」と対面。特に静岡では、快晴の空の下、大型犬の寝るよくな風合いの富士を目のあたりにして圧倒された。

そのことはナビゲートする私の声にも影響した。その日の稽古場は柔らかい日脚が床の半ばまで差しこみ、何とも心地よい空間だった。それだけでも声のトーンはやわらぐのだが、富

士山の鮮烈さに興奮を覚えている。おまけに10代の頃の記憶の引き出しをも開けてくれた。過去とのこういうつながりながらにして疑似体験の可能な遊具や家電の精度は、今後も上がり続けるに違ひない。しかし、そう簡単に身体は丸め込まれるものだろうか。少なくとも私に

リモコン一つ眼鏡一つで、居ながらにして疑似体験の可能なものだ。過去とのこういうつながりは風通しが良い。今受験したなら、けつこう良い結果が得られるかもしない。

とつて身体という代物は、アナルゴで効率が悪く厄介であるがゆえにいとしいものだ。目的行為に特化し過ぎて、周辺事象を捨象すればするほど私たちの感覚は瘦せていく。だからこそ、や気分が、その時の環境条件に左右されることはあることだ。

だが、この日はそれを痛感した。どんよりとした天候、あるいは外光の差し込まない地下室での左たなづば、身体を緩ませるのにまた別の方策が必要になる。体験とは本来、それほどまでにその場のあらゆる要素と不可分かつトータルなものなのである。

昨年末、多世代のワークショップ参加者とともに踊ったダンスは、あの日の富士山の姿と一緒にものとして私の中に獲得されている。おまけに10代の頃の記憶の引き出しをも開けてくれた。過去とのこういうつながり方は風通しが良い。今受験したなら、けつこう良い結果が得られるかもしない。

(振付家、ダンサー)

現代のことば

隅地

茉步



小さな島のほとりから

觀光地として名高い東尋坊。奇観を誇る切り立った断崖のほど近くに、観光客にはあまり知られていない無人島がある。宮崎アニメ『千と千尋の神隠し』さながらの朱塗りの橋を渡る雄島がそれである。入り口には鳥居がそびえ立ち、島全体が神域であることを示している。この島を正面に臨む地区は安東と呼ばれ、「なんばや」なる盆踊りが伝わっている。白い衣裳に身を包んだ女性たちに浴衣姿の男性も交じり、読経を思わせるアカペラの囃子に合わせて緩

やかに踊られる。洗練とは一見無縁に思える素朴な佇まい。飾り気の排除された所作の淡淡とした連なりは、洗練よりもはるかに豊かなものを孕んでいる。

福井県坂井市三国町で、足かけ4年、通算3度目の公演を行うに当たり、この町に伝わっているなにかとコラボレーションをしたいと申し出た時、開催ホールの館長さんが見せてくださったのが、このシンプルで奥深い「なんばや」の映像だった。女性のいでたちが海女着であることもその時に知った。ただ、

今は唄い踊る人が減り、保存振興会の方々の手によって守り伝えられようとしているのが現状のこと。かつては独立を保つていた集落の文化が、急速なメディアの普及などによつて一般化の運命をたどつたであろう

んぼや」の調べとともに私自身が海女着でソロダンスを踊らせていただく構成。この新作が、ご好評いただいたことを心からありがたく思う。

小さな町に根付く抛立劇場の取り組みにどれだけの親しみと

う見せてくれたようなダンスを
私も踊ってみたい」と語つてく
ださつた保存会の方の言葉を忘
れることができない。私が創作
し実演している現代のダンス
と、ある町の無形の文化財が互
いを刺激して、これまで無かつ

ことは想像に難くない。この保存会の方々のご理解で共演が決まり、現地で初顔合わせを行った。海女の経験をお持ちの方もおられる上品な老婦人たち。衣裳の身ごろの布を折り返した部分には、漁で捕れた貝を入れるのだと微笑んで教えてくださった。

実際に踊りの輪に交じつてみると、意図的な抑制によってシンブルに見せて いるのではな い、無為の深さをあらためて知る。共演作の冒頭では若いダンサーが輪に加わり、終盤では「な

驚きを運ぶことができるか。東京にある全国の公立文化施設などを支援する財団が、様々な公共ホールを現代ダンスで活性化すべく事業を立ち上げて今年で6年目。実施ホールは既に58を数えている。現地での滞在期間は1週間だが、当初は縁の無かつた土地に下見を兼ねて足を運び、派遣アーティストとして、その町の魅力をじわじわと体感する前段が重要な。事業内容の具体案もその段階で発想されるからである。

た味わいのものを作り出すこと
は幸運だ。それが舞踊の持つ普
遍的な豊かさに繋がるなり、も
う新しいとも古いとも言う必要
すらない。ジャンルの枠を超え、
新旧の尺度を越えて行くことは
容易ではない。だからこそ、今
回のような試みを根気強く続け
ていきたないと誓う。それが現代
を生きながら芸術に携わる者の
使命だと私は考えている。

晴れた日の九頭龍川の河口
は、眩しいまでに美しい。雄島
から見渡す日本海の波もまた、

た味わいのものを作り出す」とは幸運だ。それが舞踊の持つ普遍的な豊かさに繋がるなり、もう新しいとも古いとも言つ必要すらない。ジャンルの枠を超えて新旧の尺度を越えて行くことは容易ではない。だからこそ、今回のような試みを根気強く続けていきたいと誓う。それが現代を生きながら芸術に携わる者の使命だと私は考へてゐる。

た味わいのものを作り出す」とは幸運だ。それが舞踊の持つ普遍的な豊かさに繋がるなり、もう新しいとも古いとも言つ必要すらない。ジャンルの枠を超えて新旧の尺度を越えて行くことは容易ではない。だからこそ、今回のような試みを根気強く続けていきたいと誓う。それが現代を生きながら芸術に携わる者の使命だと私は考へてゐる。

